

立正大学における哲学カフェ（Ris 哲）

の実施とその展望

原田聖士・飯田凌・中川暖・神之浦仁美（立正大学文学部哲学科）

1. はじめに

近年、哲学カフェが密かなブームとなっている。立正大学でも「Ris 哲」という哲学カフェを開催している。「Ris 哲」とは、月に1回から2回の頻度で開催されている、立正大学文学部哲学科の学生、教員有志の運営する哲学カフェである。

これまで、哲学カフェについての研究は数多い。しかし、大学内で学生主体として運営されている哲学カフェについての研究は多いとは言えない。本論文の目的は、大学内でなされている哲学カフェの実態を調査し、その意義を問うことである。さ

らに、「Ris 哲」のこれまでの活動を見直すことで、今後の活動の手掛かりを得ることも、目的としたい。

本論文では、当団体に参加した学生、教員に事前にアンケートをお願いし、それをもとにして行ったインタビューの内容について分析を行う。

1.1 「Ris 哲」とは

本項では、「Ris 哲」について、概略を述べる。「Ris 哲」とは2015年11月に創設された、立正大学哲学科有志の学生および教員で運営されている哲学カフェ団体である。

実践の扉

テーマ決めや開催日時の決定は哲学カフェ終了後の当日の参加者による会議と、数名の代表者間の協議によって決定される。開催の連絡は、主に登録者へのメールによってなされているが、それ以外にも学内の掲示板での掲示、Twitterでの告知、顧問であるA教員の授業前後のフライヤー配布などによって行われている。また毎年四月には新入生への紹介のために学科主催の新入生の懇談会（茶話会）に、「Ris 哲」メンバーが参加し、告知を行っている。

「Ris 哲」の対話のルールは、以下の4つである。

- ① 人の話をよく聞きましょう。
- ② 頭ごなしに人の意見を否定することはやめましょう（批判

する場合は、その根拠を述べた上で、行うこと）。

③ 哲学用語を使わずに自分の言葉でわかりやすく話しましょう。

④ コミュニケーションボールを持った人だけが話せます。¹

また、一般の哲学カフェと比較をした場合、「Ris 哲」の特色であると思われるのは、以下の2点である。

第1に、議論をする時間が長時間に渡ることである。「Ris 哲」では、ひとつのテーマについて、3~4時間にわたって議論を行うことが多い。より具体的には、おおよそ1時間ごとに休憩を挟み、休憩時間中に、その前の議論で出た疑問を黒板などには書き、参加者も各自それについての回答を黒板に記す。次の

¹ 例えばカフェフィロ編『哲学カフェのつくりかた』（大阪大学出版会、2014年）では哲学カフェのルールとして「できるだけわかりやすく話す」「他の人の発言

は最後まで聞く」「信条を一方向的に押し付けることは避ける」というようなルールを提示している。

回では、その解答を手がかりにさらに議論を深めていく。それを3~4回繰り返すために、全体として、議論は3~4時間にわたることになる。

第2に、参加できなかった人にも広く議論の内容を知ってもらうため、後日、立正大学哲学科のFacebook、及び「Ris 哲」のTwitterにて運営有志がその回の議論の様子の詳細なレポートを作成し、掲載していることである²。

これまでに扱ったテーマとしては、「手紙とメール」「友達に年齢制限はあるのか？」などのライトなものから、「人生の意味」「自殺ほう助は罪か？」など難解なものまで多岐にわたる。また、「卒論に何を書くべきか？」「文学部はなくなるのか？」など、大学での哲学カフェならではといったテーマもあ

る。

また、独自の取り組みとして、哲学用語を用いてもよいというルールで対話を行う「Ris 哲ハード版」という企画もある

(ただし、哲学用語を使用する場合は、それについて自分の言葉で説明しなければならない)。

1.2 「Ris 哲」の歴史

2015年11月14日、立正大学品川キャンパスで第1回目が開催された。この当時は「Ris 哲」ではなく、「哲カフェ」という名称であった。哲学科の1~3年生15名の学生が参加し、「メールと手紙」というテーマについて、2時間じっくりと議論を行った。

その後、おおよそ月に1度の例会として哲学カフェを行なっていた。「Ris 哲」という名称に変更されたのは、2016年3月

² 「Ris 哲」のTwitterのアカウントは<@Ris_Philosophy>、立正大学文学部哲学科のFacebookのアカ

ウントは<facebook.com/risphilosophy/>である。

実践の扉

の第4回「友達に年齢制限はあるのか」後の会議においてである。

以下、例会以外の企画について、いくつか紹介したい。立正大学では、11月に学園祭（橘花祭）が開催される。「Ris 哲」は2016年、2017年と連続で、橘花祭に参加した。2016年は、1日目「Love」と2日目「Life」と、1日目と2日目でテーマを変え、2日間で合計6回の哲学カフェを行った。2017年には、3日間で合計5回の哲学カフェを行った。いずれの回も哲学カフェにはじめて参加するという方や、子どもの来場者にも恵まれるなど、好評を博した。

また、「Ris 哲」として、学会に協力したこともある。2017年2月に開催された、立正大学哲学会での公開シンポジウム「哲学カフェ×哲学教育 ―日本において、哲学カフェは哲学か？―」（登壇者は、村瀬智之氏、戸谷洋志氏、木村史人氏）において

「Ris 哲」メンバーが哲学カフェ体験版のファシリテーターを務めた。

さらに、2017年10月には、哲学プラクティス連絡会第3回大会前日祭において、「人生の意味とは？」というテーマで、4時間にわたる哲学カフェを開催した。

また、「Ris 哲」では、年に1度八王子大学セミナーハウスにて合宿を行っている。合宿では、1日に3~4時間の哲学カフェを2~3回開催し、対話の力を磨くだけでなく、普段はできない様々な企画にも挑戦している。たとえば、喋ってはいけない「無言でRis 哲」、自分の主張を575（77）で言わなければならない「575でRis 哲」、目隠しで議論を行う「目隠しでRis 哲」、ツイキャスで中継を行い、その場にはいない参加者の意見を取り入れながら議論する「ツイキャスでRis 哲」などである。

さらに2017年度には、スタッ

実践の扉

フの参加旅費や必要経費などに関して立正大学「鎌倉プロジェクト」の助成を受けて、立正大学鎌倉サテライトキャンパス(RUK cafe)にて2度の「Ris 哲 in 鎌倉」を開催した。テーマは、「不老不死の薬があったら、飲みますか？」(2017年9月)、「自殺ほう助は、罪か？」(2018年2月)であった。

2. 「Ris 哲」参加者の声

「Ris 哲」のこれまでの活動とその成果を分析するために、過去「Ris 哲」に参加したことのある学生16名(うち、男性11名、女性5名、執筆者4名も内に含まれる)、参加したことのある教員2名、参加したことのない教員1名にインタビューを実施した。実施した期間は2017年12月から2018年2月である。

インタビューは、まずこれまでのどの回に参加してもらった

かについてのアンケートに答えてもらった後で、それを参照しながら行われた。インタビューでは、3つの質問を行い、ICレコーダーで録音したものを、その後テキスト化し、分析した。

3つの質問内容を以下に記す。

問1 「どうして「Ris 哲」に参加しようと思ったのか？ または、参加しようと思ったきっかけは何か？」

問2 「実際に参加してみてどうだったのか？ または、どの企画に参加したのか？」

問3 「これからの「Ris 哲」がどうなってほしいか？ (要望、改善点)」

以下本論文内で、回答内容に言及する際には、個人の名前は伏せ、教員は教員A,B,C(大文字)、学生は学生a,b,c…(小文字)と表記する。また、学生に

実践の扉

については、括弧内に性別、学年、参加頻度を記す。参加頻度は、入学してから開催された「Ris 哲」に7割以上参加した場合は「高」、7割未満~4割以上は「中」、4割未満は「低」とした。また、教員については、性別および年代のみを記す。

本節以下では、まず「Ris 哲」に参加したきっかけ(2.1)、次に「Ris 哲」に参加してよいと感じた点(2.2)、「Ris 哲」の改善点、要望(2.3)をまとめる。

2.1 「Ris 哲」に参加したきっかけ

まず、「Ris 哲」に参加したきっかけが何であったのかを確認したい。「Ris 哲」に参加したきっかけが何であったのかをまとめたものが、以下の表1である。

表1 「Ris 哲」に参加したきっかけ

かけ

回答	人数
告知を見て	7
議論に参加したかったから	6
教員、友人に誘われたから	5
その他	4

表1からは、先述した学内外で行っている開催の告知が参加のきっかけとなっていることがうかがわれる。さらに「告知を見て」の内訳を分析したものが、以下の表2である。

表2 「告知を見て」の内訳

回答	人数
掲示板のポスター	2
入学時の茶話会	2
先生の講義での告知	2
Facebook	1

表1、表2からは、入学時の茶

実践の扉

話会での告知、学内の掲示板、授業前後に配布されたフライヤーが、「Ris 哲」の周知に効果的であることがうかがえる。

「告知を見て」と答えた中では、たとえば、学生 a（男性、2 年、高）は、「立正大学に入学する前から、Facebook で『Ris 哲』を知っていた。学生が学年を越えて活動している姿を見て、面白そうだなと感じた」と述べている。このように、人数は少ないが Facebook を見て、入学以前に参加を決めていた学生もいる。

また、学生 b（男性、2 年、中）は、「顧問の A 先生の『倫理学とは何か』という講義で、『ゴッホって絵下手だよな？』のポスターが配布され、楽しそうだと思い、参加した」と述べている。

さらに、学生 c（女性、2 年、中）は、「入学当初に『Ris 哲』のポスターを見て面白そうだなと思い参加しました。最初に参加した回は、『前前前世は、何を伝えたいの

か？』の回でした。参加してみてもっと哲学の議論をしてみたいなと思うようになり、続けて参加するようになりました。そして他の人たちと触れ合いながら議論を深めていくことが楽しいところであり、特徴だと思う。参加した意図には、積極的に発言できるようにになりたいという思いがあったと思う」と答えてくれた。

「教員・友人に誘われたから」と答えた参加者も多かった。たとえば、学生 d（男性、3 年、高）は、『手紙とメール』の時に友達に誘われて面白そうと思ったから」と答えてくれた。また、学生 e（男性、4 年、中）は、「最初、顧問の A 先生が企画した時に声をかけられ、面白そうと思い参加した」と答えてくれた。

本項では、「Ris 哲」に参加したきっかけが何であったのかを確認した。次項では、参加者が「Ris 哲」によいと感じた点についてま

実践の扉

とめる。

2.2 「Ris 哲」に参加してよいと感じた点

本項では、参加者が「Ris 哲」によいと感じた点についてまとめ、考察していく。

表3 「Ris 哲」のよい点

回答	人数
議論がよい	14
運営にやりがいがある	4
「Ris 哲ハード版」で哲学用語を使った議論ができる	2
その他	3

表3から「Ris 哲」のよい点として、議論が評価されていることがわかる。その内実として、たとえば、学生f(男性、4年、高)は、「(議論を通じて)あるテーマが何を問うているのかがわかるようになった。あるいは、その返答次第で今後の生活が左右される

ような問題もあり、今まで無自覚だった問題が浮き彫りになったことがよかったと感じられる」と述べている。

また、学生a(男性、2年、高)は、「はじめは参加者として参加して、『哲学対話』の面白さを感じた。そして、それは自分の予想を超える面白さであった。さらに、議論の進行もただ議論を進めるだけではなく、『用語の意味』や『AとBの違い』などを議論することで、議論により厳密さが生まれる点が良い」と答えている。

以上のコメントからは「Ris 哲」に参加した学生には、哲学カフェにおける対話の面白さや「Ris 哲」の議論の厳密さが評価されていることがわかる。

また、学生g(男性、3年、中)は、「多くの人の意見を聴くことによって様々な考え方があることが分かった」と答えている。さらに、学生h(男性、3年、中)は、「全体的に珍獣を見ているよ

実践の扉

うな感じがして、(聞いているだけでも)楽しい」と答えてくれた。

このように、議論で「発言すること」だけではなく、他者の発言を「聴くこと」を楽しんでいる参加者も一定数いることがわかった。

また、「Ris 哲」の特徴である「長時間の議論」も評価されている。たとえば、教員 B (男性、40 代) は、「時間に制約が無いので、時間を気にせずに議論でき、集中して 1 つの問いを考えることが出来る」と述べている。

さらに、運営することにもやりがいを感じているという意見が多かった。たとえば、学生 b (男性、2 年、中) は、「主催者側になり、企画などの中心になったので、とてもやりがいを感じている。そして、特にやりがいを感じた企画は、2017 年夏に開催した『Ris 哲 in 鎌倉』である。自分が企画担当ということもあり、とても楽しかった。そのやりがいが、次の企画

を行う活力になっていると思う」と答えてくれた。

他に、学生 a (男性、2 年、高) は、「ファシリテーターや書記も学生が行うために、自分に回ってくると緊張はするが、司会進行や文章をまとめる力が身につくと思う。そして、議論を通して、自分自身の発見や課題が見つかるところがよいと思う」と述べている。

さらに、「Ris 哲ハード版」を評価する意見も散見された。たとえば、学生 i (女性、2 年、低) は、「ハード版『神はいるのか?』は、外部から来た方々の意見が特に興味深かった。そして、講義でも扱わないようなことについて議論したので、難しかったが、勉強になった」と答えている。また、学生 j (男性、4 年、中) は、「『Ris 哲ハード版』をやることができよかった。もっとやってほしい」と述べている。

実践の扉

「その他」の意見として、たとえば、学生 k (女性、1年、高) は、「哲学科の学生として、先生や先輩、同級生と関われる機会を得ることができて、学生生活にプラスになった」という意見もあった。また、学生 d (男性、3年、高) は、『Ris 哲』は大学とも家とも違う第3場所のようなものと感じている。そのような場所があることそれ自体にも提供することにも意義があるのではないかと答えてくれた。

本項では、参加者が「Ris 哲」によいと感じた点についてまとめた。本項の考察からは、「Ris 哲」の参加者が議論に参加するだけではなく、その運営や授業以外のコミュニケーションの場の提供という点にも意義を感じていることがわかった。次項では、「Ris 哲」の改善点、今後の活動への要望を検討する。

2.3 「Ris 哲」への改善点、要望

本項では、「Ris 哲」の改善点、今後の活動への要望を検討する。問2、問3への回答内容における改善点、要望をまとめたものが、以下の表4である。

表4 改善点、要望

回答	人数
「Ris 哲」の運営に関すること	12
集客に関すること	8
企画に関すること	6
その他	7

表4から、「Ris 哲」の運営に関して多くの改善点、要望が挙げられていることがわかる。たとえば、教員 A (男性、30代) は、「運営側が過度な負担にならないように、参加しながら自分も楽しめるようになればよいと考えている」と述べている。

また、学生 e (男性、4年、中) は、「あくまで有志が行っているが、代表や広報など、役割を担っている人が忙しくなるときもあ

実践の扉

と思う。そのときに『仕事だから』と責任を感じすぎるのではなく、楽しみながら運営できるとよいと思う。それゆえ、学生有志で行っているという気軽さがあるとよいと思う」と述べている。

また、ファシリテーターの育成について言及している意見もあった。たとえば、学生 f (男性、4年、高) は、「ファシリテーターの進行は、授業や勉強会ではあまりやらないことなので、(最初は拙くても) やっていくうちに上手くなっていくのではないかと述べている。

また、ファシリテーターのあり方については、正反対の意見が挙げられた。学生 l (男性、3年、高) は、「ファシリテーターは、議論の交通整理に徹するべきであり、議論を積極的に引っ張っていく必要はないのではないかと述べている。

しかし、学生 m (男性、2年、中) は、「ファシリテーターが積極的に議論を引っ張ることにより、

議論が深まっていくのではないかと答えている。ファシリテーターの役割について、参加者の間でも正反対の考えがあることがわかった。ファシリテーターの役割に関しては、学外の哲学カフェでも様々であることもあり、「Ris 哲」の今後の検討課題としたいと思う。

さらに、「集客」についても改善を求める意見が多かった。たとえば、学生 k (女性、1年、中) は、「同級生の参加者が少ないので今後増えてほしい」と答えている。また、教員 A (男性、30代) は、「もっと広い層を取りこむためにはどうすればよいかということを検討する必要がある」と述べ、課題として挙げている。

インタビューの中で、何名かの学生は集客するための改善案を挙げてくれた。

例えば、学生 a (男性、2年、高) は、「より多くの人たちに参加してもらうために、学内の宣伝か

実践の扉

らしっかりとしなければならぬと思う。時間の空いている学生が自主的に顧問の A 先生の講義に宣伝しに行ったり、ポスターを自ら作成したりしなければいけないと思う」と述べている。

また、学生 b (男性、2 年、中) は、「SNS を活用し、誰でも参加してもよいという雰囲気を出し、ポスターを数多く掲示したいと思う」と答えている。

さらに、学生 f (男性、4 年、高) は、「自分たちが興味関心のあることよりは周りを見渡してテーマを決めることがよいと感じる。さらに、哲学をしていない人が今どんなことに興味があるのかを調べ、それをテーマにした方がよいと思う」と改善点を挙げている。

また、「テーマ」については、学生 f (男性、4 年、高) 以外からもいくつかの要望が寄せられた。たとえば、学生 j (男性、4 年、中) は、『前前世は、何を伝えたいのか?』などは問いが明確ではなく、迷走していると感じた。テ

マ選びに関しては、歌詞解釈など内容を掘り下げることが大変そうなのは避けるべきではないか」と答えている。

また、学生 o (女性、1 年、中) は、『神はいるのか?』などの哲学的な事柄をテーマとした方が個人的には、よいと思う」と答えている。他方で、学生 f (男性、4 年、高) は、「日常的な生活の中の事柄を哲学カフェのテーマにした方がよいと思う」と述べている。

学生 o (女性、1 年、中) と学生 f (男性、4 年、高) の意見のように、テーマについても「哲学的なテーマ」を好ましいと考える学生もいれば、「日常的なテーマ」のほうが好ましいと考える学生もいることがわかった。「Ris 哲」にはどのようなテーマがふさわしいのかは、今後検討が必要であるだろう。

「その他」に分類された意見としては、たとえば、学生 j (男性、4 年、中) の「哲学用語を使う『Ris 哲ハード版』をもっとやっていい

のかもしれない」という意見や、教員 A (男性、30 代) の「これまでの『Ris 哲ハード版』は一見してテーマが難解なもの(『継起とは何か?』『神はいるのか?』)であったが、例えば『年賀状出した?』などのようなテーマを『Ris 哲ハード版』でするのもよいのかもしれない。その反対に、普通の『Ris 哲』でも難解なテーマにチャレンジしてもよいかもしれない」という「Ris 哲ハード版」についての意見があった。

また、学生 c (女性、2 年、中) は、「お菓子や飲み物を議論の最中にもつまめるように工夫が必要であると思う」という議論の場の整備に関する意見もあった。

本項では、「Ris 哲」の改善点、今後の活動への要望を、問 2、問 3 への回答内容から抽出し、検討した。その結果、運営の方法、ファシリテーターの育成及びあり方、集客、テーマの方向性などについて改善の余地があることが

分かった。

3. 「Ris 哲」及び哲学カフェへの批判

「Ris 哲」に関わっていない教員 C (男性、60 代) にもインタビューを行なった。本節では、そのインタビューで寄せられた「Ris 哲」及び哲学カフェへの批判を検討していく。

まず、教員 C は「Ris 哲」に関わらない理由を、議論することの意義自体は認めた上で、「複数人で議論をすることが得意な人もいれば、自分一人でモノを考えたというタイプの人もある。そういう人たちのことを考えると、『Ris 哲』には積極的に関わらずに、自分一人でモノを考える人の相談相手になったほうがよいと考えたから」と語っている。

さらに、教員 C は、議論をする

実践の扉

ことについて、次の2点を疑問視している。すなわち、議論をする前の準備と議論後の文章化である。教員Cは「議論をするための準備、議論が終わってからのまとめをしているのかどうか懸念される」と述べ、議論の後で議論の内容を文章化するのだけではなくて、哲学者の文献にあたるなどして考えを補強した方がよいのではないかと話してくれた。

さらに、文章化について、教員Cは中世スコラ哲学の討論形式の授業をあげ、「例えば愛について議論するのであれば、それに関する本をいくつか挙げておき、全員がそれを読んだ上で議論をするなどをしたほうが実りのある議論ができると思う」と提案してくれた。

このような意見は、従来の大学教育、すなわち哲学書の精読や知識の蓄積を重視する哲学研究の立場からなされた、哲学カフェや哲学プラクティス一般に向けられた批判・疑念の一種として位置

づけることができる。すなわち、哲学カフェでの議論は知識を必要とはせず、まとめをすることもないために、哲学的なテーマに関する議論が深まらないのではないかという懸念が、従来の哲学研究の立場から、表明されたと考えられる。

以上のような懸念・疑問は、これまでの大学での哲学教育のあり方を考えた場合、一方ではもつともであるといえるものの、しかし、哲学カフェや哲学プラクティスにはそれらにはない固有の意義を認めることもできるのではないだろうか。

第1に、哲学カフェでは、先述した哲学カフェのルールにあるように、「自分の言葉でわかりやすく話す」ということが重視されている（哲学用語の使用を条件付きで認める『Ris 哲ハード版』でも、自分の言葉で説明する必要がある）。哲学用語などの専門知識を使わずに自分の言葉で議論することによって、自らの意見を

実践の扉

まとめる訓練になると考えられる。

このことが必要であるのは、しばしば哲学を学ぶ学生同士で議論をする際に、「ある哲学者が述べているから正しい」というような権威づけがなされ、議論が「どれだけ哲学に関する知識を持っているか」というパワーゲームとなってしまうことがあるためである。このような議論は、自身で考えておらず、本当の意味で「哲学」していない状態といえるだろう。それに対して、哲学カフェの議論は、知識に頼らないというルールを設けることで、自身で考えることを促しているのであり、知識に頼った議論よりも、むしろ「哲学」しているといえるのではないだろうか。

第2に、哲学カフェの議論には、文献や知識を前提としていないがゆえの、議論の拡がり、自由さがあるといえる。哲学カフェでは、当初予定していたテーマから派生したテーマに議論が逸れるこ

となどは珍しいことではない。これらは議論が拡散するという点では難点であるといえるが、参加者同士の様々な意見が交換されることによって、一人で考えるだけでは思い付かなかった意見との出会いや気づきを体験することができる点は、哲学カフェの長所といえるだろう。

第3に、我々が人生で出会う問題に対処し、それらについて考える際に、哲学や専門的な知識は必要不可欠とは言えず、さらに、多くの者は哲学によらずして、それらの問題を解決しなければならぬことが挙げられる。例えば「愛」について悩み、考えることは、愛に関する理論や哲学的知識を持っている者の特権ではない。我々は、たとえ愛に関する理論を知らずとも、日常的な体験や経験において「愛するとはどういうことか」といった問題について考えており、また考えざるをえない。日常的に我々が直面しなければならない多様な問題に対処する

ためには、哲学カフェにおける議論の方が有効で実際的な力を養えるといえるのではないだろうか。

第4に、哲学カフェでは、既存の哲学ではあまり議論されてこなかった問題について議論することができることも、哲学カフェの意義といえるだろう。例えば、「Ris 哲」では2017年の橘花祭において「いいね!の価値」をテーマとした哲学カフェを開催した。参加した学生c(女性、2年、中)は「SNS全体で『いいね!』がどういう使われ方をしているのか、聞くことができ、自分とは違う考え方を知ることができた。さらに、SNSが現代の社会において、どのように捉えられているのか、考えるきっかけになった」と語っている。

このように、伝統的な哲学ではカバーしきれなかった現代的でアクチュアルな問題について議論することができるという点も、哲学カフェの意義といえるだろ

う。

最後に、教員Cの言うように、事前事後の学修を強化することは、哲学思想の理解という点では有益であるかもしれないが、それを哲学カフェ(『Ris 哲』)に導入することは、哲学についての知識がなくとも対等に議論し合えるという哲学カフェ(『Ris 哲』)独特の長所を損なうことになることが懸念される。それゆえ、それらの学修は大学での講義や、大学内外の研究会や読書会といった場でなされるべきであり、哲学カフェにそれらを要求することは正当ではないといえる。

以上、5つの点から教員Cの意見について再反論を行い、哲学カフェ(『Ris 哲』)の意義を再検討した。しかしながら、根本的な問題であるために、本稿だけでは十分に議論が尽くされたとは言いがたい。今後の課題としたいと思う。

4. おわりに

実践の扉

本論文では、主に「Ris 哲」の参加者へインタビュー調査を行い、それを分析することで、

「Ris 哲」の実態を調査し、よい点と改善点について考察してきた。

本論文の成果を踏まえて今後の活動の指針を探るならば、まず参加者を増やすためには、現在までの告知の方法を継続するとともに、内容や方法などをさらに改善していかなければならないだろう。また、「Ris 哲」の議論は参加者から高く評価されたものの、運営に関しては、さらに改善の余地があることがわかった。さらに、ファシリテーターのあり方やテーマの選択については、多様な意見が存在することが明らかとなった。それゆえ上記の点に関して、今後はより効率的なあり方を模索、検討していかなければならないだろう。

本稿の成果を踏まえて、「Ris 哲」という場が、参加者にとっ

てより有意義な議論の場となるように努めていきたい。

最後に、アンケート並びにインタビューに協力して頂いた教員及び学生の皆様に深謝を申し上げる。

5. 参考文献

- クリストファー・フィリップス『ソクラテス・カフェにようこそ 誰にでもできる哲学への招待』森丘道訳、光文社、2003年。
- マルク・ソーテ『ソクラテスのカフェ』堀内ゆかり訳、紀伊国屋書店、1996年。
- 鷺田清一監修、カフェフィロ編『哲学カフェのつくりかた』大阪大学出版会、2014年。